

[研究関心]

生涯学習の手応え

草間明子^{*}

1. 生涯学習論を受講して

平成 22 年度の 1 学期に「生涯学習論」を受講した理由は、資格をとるために必要だったからである。正直なところ実際に授業に出るまでは、この授業で何を学ぶのかを、よく思い描けない状態であった。

大学を卒業後に会社勤めを経験し、現在はつくば市内に住む主婦であり、茨城県内のアートプロジェクトや美術館でボランティア活動してきた私は、すでに様々なかたちの学びを経験している。ともに授業を受けた二十歳前後の現役大学生とは、授業の印象が少し違うかもしれない。

授業の最初の印象は、これから生涯学習の段階に入る人たち向けのオリエンテーションのようにも感じられた。授業全体を通しては、生涯学習は広く・永く・自由であり、だからこそ学習者の意欲が大切なのだということを、おおまかにではあるが理解できたと思う。結果的に満足のいくように大人が学ぶためには、自主自立的な態度が重要になることは、私のこれまでの実感とほぼ一致している。

さらに、対話形式を取り入れたこの授業そのものに当てはめると、一人ひとりの参加態が授業の質を左右する可能性が、大いにあるということだろう。ひとつの授業を自分が所属する小さなコミュニティと捉えれば、自らの発言や態度は他人へ影響を与え、回り回って最後に

は自分へと帰ってくるのが、容易に想像できる。豊かで幸せな生活というものが、自分ひとりでは成り立たないのと同じである。

筑波大学には、キャンパスの近辺に住む学生が多い。各学生にすれば在学中の仮住まいにすぎないかもしれないが、やはり大学の近くに住む私から見れば、同じ地域の住民どうしである。授業中にあらためてそのことを感じた。若い彼らにもぜひ、生涯にわたって自らすすんで学びつづけてほしいと思う。

より多くの人々が、人生の適切な時期に、適したかたちで学ぶことを可能にするために、学ぶうえでの社会的な制約をなるべく減らすことが、社会教育の課題であること。解決のための様々な方法が生み出されてきた歴史などについても、授業で学ぶことができた。

また、教科書的に使用される本（小池源吾・手打明敏編『生涯学習社会の構図』）があったので、安心して授業に臨むことができた。授業内容に関連した参考図書が逐次紹介されたこともありがたかった。私の場合、その中で興味を持った一冊が近所の書店ですぐに手に入り、軽い気持ちで読んだところ、すばらしい読書体験になった。

2. ボランティアについて

振り返れば、今まで細々とボランティア活動を続けて来られたのも、自分にとってはそこでき得られない、何か良いことがあるからに違いない。具体的には、新しい友人ができる・無

^{*} 筑波大学人文学類 科目等履修生

料で働く代わりにそこから無料で学べる・社会参加しているという実感が得られる、などと感じていたが、どこかすつきりとしめないものがあった。ボランティアをするうえでの決定的な魅力が何なのか、それがどこから得られるのかについては、よくわからなかったのだ。

生涯学習論の授業で紹介され、ようやく会うことができた本には、私のモヤモヤにみごとに答えてくれる文章が書かれていた。1992年初版の岩波新書『ボランティアもうひとつの情報社会』である。

最近の動向がフォローされていない点があるかもしれないが、当事者にとって大切な部分に焦点を当てている本だと私は思った。もちろん、私がここで触れる以外にも様々な興味深いことが書かれている。

著者の金子郁容氏によれば、ボランティアをする人は、自分がなにかを与えている相手から、逆に報酬をもらえるチャンスがあるという。これは多くのボランティアが現場で感じ取っていることだろうと思う。

しかしこれで終わらず更なる見解が示されたことにより、私は心の底から納得することができた。

思いがけず逆に相手からもらえたあることが、自分にとって価値があり、これこそが報酬なのだと思える自由が、ボランティアのひとりひとりに有り、それゆえに、ボランティアが見いだした価値は多様で、多くの場合、簡単にお金に換算できないものになる、という見解である。

著者はさらに、金銭評価になじみにくい価値ということについて、ネットワーク上の「情報」との類似性を指摘している。

私には、人間の価値が単に成績や年収で測れるものではないことと、どこか似ていると感じられた。また、授業で学んだ「社会関係資本」という概念に通じるのではないかとも思った。

おそらく、多くのボランティアの現場では、

人と人とが出会い・認め合い・協力するなかで、新たな価値がつくられていくのだと思う。ボランティア活動の魅力は、一種の創造性にあるのではないだろうか。

3. 「地域と教育」研究会への参加

生涯学習論の教室で案内されなければ、私が「地域と教育」研究会に参加することはなかったかもしれない。授業の休み時間に、研究会メンバーの学生がチラシを配りながら参加を呼びかけてくれたことが、私にはわかりやすかった。

研究会の活動内容は、授業の内容から推し量ることもできた。私にも関係があって何か面白いことが行われる場なので、という期待を徐々に抱いたものの、参加を希望するまでに2ヶ月近く迷ったのを覚えている。

その後、1学期末と3学期末の2回ではあるが、研究会に参加することができた。研究会の内容は期待を裏切らず、興味深く有意義なものだったが、仲間に入れたことが一番の成果だと思う。

まずは、参加した経験を不安や喜びなどの正直な感情を含めて振り返ることが、今の自分には必要だと感じている。それが、私が地域社会のなかで生涯学習を続けていくことや、美術館ボランティアとして他の人々の学習を支援していくうえで、ひとつの手がかりになってくれるのだと思う。

4. おわりに

私は平成21～22年度に、科目等履修生として筑波大学にお世話になった。目的であった学芸員の資格取得に必要な履修を終え、ひとまず目標を達成したこの時期に、この文章をまとめることにより、大学で学んだことを振り返ることができた。機会を与えていただいたことに感謝している。